

チェチェン 紛争

大富 亮

No. 94

ユーラシア・ブックレット



229.8

2

開架

企画・編集＝ユーラシア研究所・ブックレット編集委員会
発行＝東洋書店

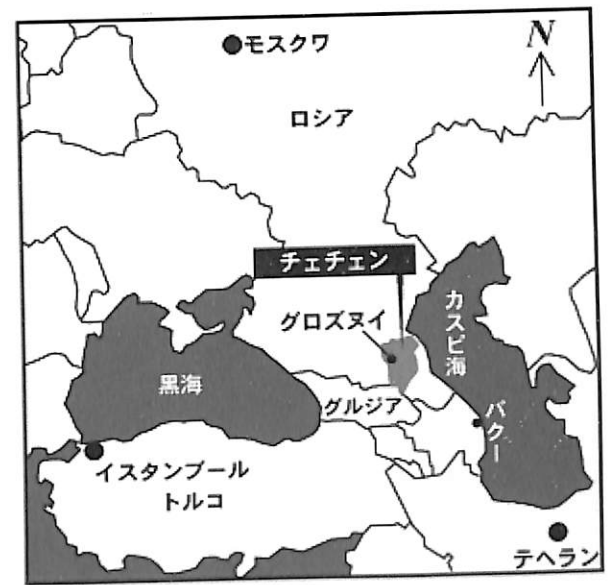
チェチェン紛争

大 富 亮

参考文献	63
おわりに	61
第六章 チェチェン戦争と世界	50
第五章 第二次チェチェン戦争	29
第四章 戦間期	25
第三章 第一次チェチェン戦争	19
第二章 歴史	6
第一章 チェチェンとは	4
はじめに	2

〈表紙写真：市民たちが組織した平和行進の途中で、チェチェン独立派のレジスタンスと「ロシア兵士の母委員会」のメンバーが語り合う。1995年3月、サマーシキ村で。林克明（ジャーナリスト）撮影〉

ユーラシア・ブックレット No.94



「チェチェン」関連地図



■参考文献

- 植田樹著「チェチェン大戦争の真実 イスラムのターバンと剣」日新報道 2004年
- アンナ・ポリトコフスカヤ著 三浦みどり訳「チェチェン やめられない戦争」NHK出版 2004年
- アンナ・ポリトコフスカヤ著 鍛原多恵子訳「プーチニズム 報道されないロシアの現実」NHK出版 2005年
- ハッサン・バイエフ著 天野隆司訳「誓い チェチェンの戦火を生きたひとりの医師の物語」アспект 2004年
- 徳永晴美著「ロシア・C I S南部の動乱 岐路に立つプーチン政権の試練」清水弘文堂書房 2003年
- パトリック・ブリュノー／ヴィアチスラフ・アヴユツキー著 萩谷良訳「チェチェン」白水社・文庫クセジュ 2005年
- 塩原俊彦著「ロシア経済の真実」東洋経済新報社 2005年
- 塩原俊彦著「ロシアの軍需産業 軍事大国はどこへ行くか」岩波書店 2003年
- リンダ・マクウェイグ著 益岡賢訳「ピーク・オイル 石油争乱と二一世紀経済の行方」作品社 2005年
- 和田春樹編「ロシア史」山川出版社 2002年
- 林克明・大富亮著「チェチェンで何が起きているのか」高文研 2004年
- 「中央ユーラシアを知る事典」平凡社 2005年
- 「新版ロシアを知る事典」平凡社 2004年
- A. Avtorkhanov "Ubiistvo checheno-ingushskogo naroda: Narodubiistvo v SSSR" Svobodnii Kavkaz 1952
- Carlotta Gall and Thomas de Waal "Calamity in the Caucasus" New York University Press 1998
- "UNHCR Global Report 2004"
- Amjad Jaimoukha "The Chechens" Routledge Curzon 2005
- John B. Dunlop "THE OCTOBER 2002 MOSCOW HOSTAGE-TAKING INCIDENT" RFE/RL Organized Crime and Terrorism Watch Reporting on Crime, Corruption, and Terrorism in the Former USSR, Eastern Europe, and the Middle East 18 December 2003, Volume 3
- Johanna Nichols 日本カフカスクラブ訳 "Who are the Chechen?" on Linguist list, 13 Jan. 1995 <http://chechennews.org/basic/whochechen.htm>
- Kommersant: マスハドフ: 私の呼びかけはプーチン大統領に宛てたものだ <http://d.hatena.ne.jp/ootomi/20050207/1117977109>

その人々の政治参加の機会を奪う結果になりかねない。むしろ、国内の問題に対して武力による解決に傾きながら、一方で少数民族の政治参加の機会を奪うような政策そのものが、大国側が言うところの「テロリズム」を育てているのではないだろうか。

筆者は、モスクワ劇場占拠事件や、北オセチア・ベスラン学校占拠人質事件の経過を見守ってきた人間として、チェチェン側の取ってきた行動をすべて支持するつもりもない。子どもたちの命をたてに政治的要求を行うことのむごさを感じない人間は、そう多くはないはずだ。

ある国の、ある地方の人々が民主的な国民投票を経て独立を選ぶこと自体は、あってもおかしくない。ただ、国の側がそれを押しとどめようとするときに、暴力ではなく、冷静な対話と一定の譲歩が交わされるべき、平和的な関係がづくりだされるのだと思う。

そうした和平が今後のロシアとチェチェンの間で可能となることを祈りたい。

本書に続けて、さらにチェチェンの問題について詳しく知りたい読者には、ひとまず巻末の参考文献をおすすめしたい。とりわけ、戦禍のチェチェンで多くの傷ついた人々を救った外科医ハッサン・バイエフの自伝「誓い」(アспект)は、ロシア人、チェチェン人を問わずに治療を続けたバイエフの活躍ぶりが、いきいきとした文体でつづられており、現代のチェチェン人の習俗などにも触れられていることから、興味のつきない一冊である。

二〇〇六年五月

大富 亮

ユーラシア・ブックレット

好評発売中 A5判・64頁
定価各630円(本体各600円) ¥240

ブックレット発刊によせて

1989年1月、総合的なソ連研究を目的とした民間の研究機関としてソビエト研究所が設立されました。当時、ソ連ではペレストロイカによる改革が進行中で、日本でも日ソ関係の好転のためにその改革に期待をかける人々が少なくありませんでした。しかし、ソ連再建をめざしたペレストロイカの行き着いた先は、皮肉にもソ連崩壊でした。

1993年、研究所はユーラシア研究所と改称し、主としてロシアをはじめ旧ソ連を構成していたユーラシア諸国についての研究と学術交流を引き続き行うとともに、「日」としてのユーラシア諸国民との相互理解と友好の発展」という観点から、ユーラシア諸国に関する正確な知識の普及に努めています。

この地域についての情報がまだまだ断片的で限られた分野のものにとどまりがちなかで、今回のブックレット発刊は、ロシア・ユーラシア諸国に関する多面的な情報を提供するだけでなく、日本ではあまり知られていないこの地域の広くて深い世界を楽しんでいただくことを目的としています。読者のみなさんが、このブックレットをつづじてユーラシア諸国の隠れた魅力を見つけてくだされば、と願っています。

21世紀は、アジア・太平洋の平和的環境を恒常化し、日本とロシア・ユーラシア諸国の共生の条件を作り出す時代となるでしょう。その意味でも、2000年にこのブックレットを発刊する意味は大きいと自負しています。

ユーラシア研究所・ブックレット編集委員会

91 ショスタコーヴィチ

梅津紀雄

―揺れる作曲家像と作品解釈―

今年生誕100年を迎えるロシアの作曲家ショスタコーヴィチの生涯と業績をまとめた冊。社会主義冷戦という状況下におけるその創作活動と、難解と思われがちである代表的な作品紹介を主に構成した。

92 チャイコフスキー

宮澤淳一

―宿命と憧れのはざま―

「宿命」憧れ」をキーワードに、西欧ではじめて認められ、バレエ音楽や交響曲で有名なチャイコフスキーの生きた53年間と作品を総覧する。第15回吉田秀和賞を受賞した気鋭の評論家による一冊。

93 中央アジアの朝鮮人

半谷史郎・岡奈津子

―父祖の地を遠く離れて―

朝鮮半島からロシア極東に移住し、さらにスターリンにより、遠く離れた中央アジアに強制移住させられた朝鮮人達がいる。独自の生活文化を築いて今もその地に暮らしている朝鮮人達の歴史と現状を報告する。

94 チェチェン紛争

大富 亮

1994年、ロシアの軍事侵攻にはじまる「チェチェン戦争」。さらに複雑な泥沼へ進もうとしているかに見えるチェチェン情勢について、紛争に至る歴史的な経緯と、現在の人権状況についてもまとめた。

95 アニメの詩人ノルシユテイン

児島宏子

―音・響き―

1979年制作の代表作「話の話」などで著名な、現代ロシアを代表する世界的アニメーション作家ノルシユテイン。その生い立ちから作品の数々を交流のある著者が数々のエピソードを交えながら紹介。

大富 亮 (おおとみ あきら)
神奈川県生まれ。「チェチェンニュース」発行人。大学卒業後、市民平和基金に勤務。1999年に第二次チェチェン戦争が始まり、広報などを担当したことでチェチェン問題に関心を持ち、情報収集を続け、2001年からメールによるニュースレター、「チェチェンニュース」と、ウェブサイト「チェチェン総合情報」を運営している。チェチェンにはまだ行ったことがない。いつか行きたいと思っている。

チェチェン総合情報：<http://chechennews.org/>


96 多民族連邦国家ロシアの行方

- 97 ロシア・オペラ 名作20選
- 98 日ロ平和条約への道 行動計画・サハリン開発を通じて
- 99 明治日本とロシアの影
- 100 ロシア料理・その2 中央アジアからバルトまで
- 101 中・ロ国境の旅 「4000キロ」の舞台裏
- 102 中央アジアの生態環境 ユーラシア-新世紀の自然の宝庫
- 103 ロシアの陪審裁判
- 104 世界一周した漂流民
- 105 おはなしは国境を越えて ロシア絵本の世界
- 106 現代に生きるチェーホフ
- 107 ロシアの文字の話 ことばをつつとどめるもの
- 108 ロシア極東の森林と日本
- 109 天山の小さな国・キルギス 日本語教師の遊覧記
- 110 ロシアカメラの世界 隠れた人気の秘密
- 111 ロシア建築 三つの旅
- 112 苦悩するロシア軍
- 113 ロシア語 セカンドステップ 基本動詞60
- 114 南極に立った樺太アイヌ 白瀬南極探検隊秘話
- 115 ロシアに渡った日本人 江戸・明治・大正・昭和
- 116 ロシア小話 アネクドット 腐敗と笑いを飛ばせ
- 117 ロシアの石油・天然ガス
- 118 歴史の狭間のペラルーシ

99 モンゴル民族の近現代史

- 100 トロイカから私を呼んでまで 続・ロシア愛唱歌集
- 101 日露戦争 世界史から見た「坂の道」
- 102 現代ロシア政治を動かす50人
- 103 ウラジオストクの日本人街 明治・大正時代の日露民間交流が語るもの
- 104 ロシア・アニメ アヴァンギャルドからノルシユテインまで
- 105 (著作) 続々日本のなかのロシア ロシア文化と交流史跡を語る
- 106 ジャポニスムから見たロシア美術
- 107 ほろ酔い加減のロシア ウラギス・日本
- 108 DVDで愉しむロシアの映画
- 109 第二次世界大戦を見直す 終戦60年によせて
- 110 プチャーチン提督 150年の軌跡
- 111 ドストエフスキー・カフエ 現代ロシアの文学風景
- 112 ロシア庭園めぐり
- 113 テルミン ふしぎな電子楽器の誕生
- 114 ゲルギエフ カリスマ指揮者の軌跡
- 115 ロシアの科学者 ソ連崩壊の衝撃を超えて
- 116 フィギュアスケート王国ロシア
- 117 ロシア・アヴァンギャルドから見た日本美術
- 118 民族楽器バラライカ
- 119 いまどきロシアウオッカ事情
- 120 ロシア・ファンタスティカ(SF)の旅

①～⑧を含め全点在庫有り、好評発売中。

 東洋書店

〒162-0805 東京都新宿区矢来町97
TEL 03(3269)2961 FAX 03(3269)2110
<http://www.toyoshoten.co.jp>
info@toyoshoten.co.jp

チエチエン

Que Sdis-je?

【文庫クセジュ】

パトリック・ブリュノー / ヴィアアチエスラフ・アヴユツキー 著
萩谷良訳

白水社

Patrick Brunot et Viatcheslav Avioutsii
La Tchétchénie
(Collection QUE SAIS-JE? N°3332)
©Presses Universitaires de France, Paris, 1998
This book is published in Japan by arrangement
with Presses Universitaires de France
through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.
Copyright in Japan by Hakusuisha

目次

序文

7

第一章 チェチエン人の起源

11

第二章 歴史概要

13

I 前ロシア時代(一八一六年まで)

II 大カフカス戦争(一八一六～一六四年)

III 帝政時代(一八六四～一九一七年)

IV 山岳共産国から民族強制移住まで(一九一七～四四年)

V カザフスタンへの流刑と帰還(一九四四～九一年)

VI 独立主義(一九九一～九六年)

第三章 地理と天然資源

40

I 民族集団の歴史の変遷

II 水系と道路

III 豊かな地下資源と「中央部」をめぐる闘争

第四章 石油を中心とした経済

57

I ロシアの古くからの油田

II 農村部

III 戦略上の焦点となったパイプライン

第五章 社会組織と宗教

78

I 氏族制度

II アニミズムと多神教

III スーフィズムとムスリム教団

第六章 世界のなかのチェチェン人

89

I 最初のディアスポラ——「大戦」の難民（トルコ・シリア・ヨルダン）

II 第二のディアスポラ——スターリン主義による強制移住者
（カザフスタンと中央アジア）

III 第三のディアスポラ——ロシアとヨーロッパ

第七章 国家制度

103

I 部族体制

II シヤミリのイママート制

III 山岳共和国とソウイェト自治

IV イチケリア・チェチェン共和国

第八章 現在の政治

124

I 独立主義勢力

II 親ロシア勢力

第九章 「戦争」

137

- I 一九九一年の革命
- II 封鎖（一九九二～九四年）
- III ロシアの軍事介入（一九九四～九六年）
- IV 一九九六年以降の「正常化」

結 語

162

『チェチェン』 日本語版への補遺

164

解説「チェチェン紛争の現在」

170

訳者あとがき

177

参考文献

i

序 文

非ヨーロッパ系諸部族の不幸は、理解されないことにあるのではなく、間違った理解をされていることにある。

ギュスターヴ・ルボン¹⁾

カフカス¹⁾地北部のこの小さな共和国は、一九九一年に大統領に選ばれたソ連軍空軍少将ジョハル・ドゥダエフがソ連からの独立を宣言して以来、西欧マスメディアにその動向を注視されてきた。初期の暴動、三年間の経済封鎖、そしてロシアの軍事介入は、この小さな国の国民がロシアという桎梏に対して挑んだ戦いの歴史に残るおもな出来事である。

(1) ギュスターヴ・ルボン（一八四一～一九三一年）…フランスの医師・社会学者。群衆心理研究、インドおよびアラブの文明に関する著作で知られる〔訳注〕。

西洋諸国は、東側諸国の民主化にはつねに注意を払ってきたので、経済封鎖と戦争の犠牲となってきたチェチェン人の苦しみに共感を惜しまなかった。クレムリンの権力のまさに基盤をゆさぶった彼らの力と勇気を養え、この小さな国の状況に考慮を払うことを務めとしてきたのである。

とはいえ、国際社会により認知されぬこの司法の空白で生き延びている国は、チェチェンばかりではない。アブハジア自治共和国、南オセチア自治州、沿ドニエストル共和国など、自己宣告の共和国が現に存在し、しばしば独自の法律と自国通貨を持っているのである。ロシアも欧州諸大国も、こうした国々の存在を故意に認めない。チェチェンも、その反植民地主義独立闘争はヨーロッパ人の強い同情を惹いているのに、そのあらゆる努力にもかかわらず、つねにロシアの外交的制裁による脅しを受け、国際社会からの認知を受けていない。

ロシア、グルジア、モルドヴァのように「より強大な」国の言い分がつねに通じ、小国の自決の権利はまったく認められないということが、ここに明らかに見てとれる。二十世紀末の今、国際関係の論理はこれからも、「強者」による「弱者」の支配にもとづくべきなのだろうか？ 民主主義というのは、国際社会の主要メンバーによってかくも強く擁護されていながら、弱小な、建国して日の浅い、少数の国には適用されてはならないものだろうか？

チェチェン人ほど民主主義を拒否された民族はほかにないように思われる。輝かしい武勲の数々に彩られたその全歴史と、たえざる闘争とを通じて、チェチェン民衆はその堅忍不拔を証明してきた。自由はチェチェンの宇宙に不可欠の要素であり、それなしには彼らの存在が考えられないものである。だからこそ、彼らに外部の意思を押しつけようとした、あらゆる試みは、猛烈な抵抗にぶつかったのである。チェチェン人はたしかに負けはしたが、ほんとうに従属したことは、けっしてない。

この文脈で、ひとつの問いが浮かぶ。自由なチェチェンというのが、こんにち可能なのだろうか？ これに答えるためには、この民族の歴史をたどってみる必要がある。すなわち、この国の歴史をロシア史から切り離し、最近起こったもろもろの事件の過程を詳細に分析するなかから、この闘争に参加している多数の主要人物を明らかにするのである。

「チェチェンの独立はロシアの終焉を引き起こす」というような言い回しは避けるべきである。チェチェンとの戦いが、ロシアにおいて民族主義の復興を招来したことを考慮すべきである。チェチェン問題は、ロシアのすべての政治の公約において不可欠の要素となっている。

西欧は、チェチェン問題をロシアの「内政問題」だとして、この闘争に公式に介入することをいっさい避けてきた。

この問題は逆説的である。チェチェン問題は西欧メディアによって実によく取りあげられているというのに、西欧諸国は、古代初期にまで歴史を遡れるカフカスの、この古い民族のたどってきた変遷につ

いては、ほとんど知ることがないのだから。

第一章 チェチェン人の起源

チェチェン人は、明らかにカフカス最古の民族のひとつである。これは、多数の考古学的研究によって証明されているところである。カフカス山地の地峡地帯に存在してきた諸文明は、その起源を古代エジプトにまで遡ることができる。カフカス山脈地帯は、民族大移動のときにここを通過していった多数の部族の避難所となった。

この時代に関して、チェチェン語で書かれた史料は残っていない。そういうものがあれば、ちょうどロシア人の場合のネストルの年代記『原初年代記』のように、チェチェン人の年代記が残ることになっただろう。チェチェン人、あるいは彼らが属するより広範囲の民族であるヴァイナフの足跡を再び見出すためには、民間伝承、あるいは他国や他民族の歴史的資料によらなければならない。

民間に伝わるある伝説によれば、チェチェン人の先祖はシリア（シャーム）から出たという。彼らは古代に、ナヒチ・ヴァン（現在アゼルバイジャンのナヒチェヴァン自治共和国）に住みついた。そしてそこから、

訳者あとがき

本書は、Patrick Brunot et Viatcheslav Avoutskii, *La Tchétchénie* (Coll. « Que sais-je? » n°3332, P.U.F., Paris, 1998) の全訳です。訳している最中の三月八日にマスハドフが暗殺されました。日本でいえば四国ほどの面積の山あいの小国が、一九九一年にイチケリア・チェチェン共和国と名乗って独立への歩みを踏み出して以来（本書の著者は序文にあるようにこれを独立と言いつける立場を取っています）、一五年間で独立派政権の三人の大統領全員をロシアの手で暗殺されているのです。

マスハドフは、ドゥダエフの強引さ（本書の著者は明確にそれに批判的です）はなく、ロシアとの協調を重んじ、一方ではバサエフらの要求をいれてシャリーアを施行するなど、妥協的とも評されますが、堅実であり、一九九七年にチェチェン国民の過半数による信任を得て選ばれた大統領です。本書の著者も含め、チェチェンに関心を寄せる人たちの大勢は、マスハドフを評価していたと思います。

このような人物を狙いつづけ、ついに倒してしまったロシアは、イラク戦争を起こした米国と同じく、

石油に大きな利害関心があるのはたしかですが、チェチェンがロシア経済にとって極要であるなら、それだけに、紛争や残虐な蛮行によって押さえつけようというのは、不経済で、目的にそぐわないやり方ではないでしょうか？ 米国のイラク戦争と同じ疑問を抱かざるを得ません。

よくよく小国の独立宣言が気に入らなかつた大国のエゴと、ソ連邦崩壊以後の軍需産業の需要創出と軍部の保身、ということなら、アル・カイダの名をもちだし、イスラム原理主義を好都合な仇役に仕立てている点も含め、これまた米国と変わりありません。よく似た大国どうしが、互いの悪を見て見ぬふりをします。二十世紀から大規模な産業の市場となり、膨大な非戦闘員の死傷と環境破壊を伴うようになった戦争が、そうして続きます。ソ連邦崩壊のときすでに予見されていた事態です。「市場の究極の勝利」に酔うむきがそれを「知らず」にいたのは、故意にでしょうか。

モスクワの劇場占拠事件、北オセチア、ベスランの小学校占拠事件以来とくに、チェチェンが話題になります。最近では、映画監督テオ・ファン・ゴッホがイスラムに批判的な映画を作ったために殺され、その犯人としてチェチェン人が取り沙汰されたり、ロンドンの同時爆破事件でも、犯人にチェチェン人が入っているなどと言われるたびに、少数者が警察に狙われて冤罪事件に巻き込まれるように、力のない小国が都合よくスケープゴートにされることを危惧します。

こういうマイノリティについては、まだ情報は多くありません。本書は、チェチェンと言えばその歴史と宗教と対ロシア関係という一般にまず考えられる枠組より、もう少し広い、多面的な記述を試みたという点で、チェチェン問題に関心をもつ人たちにお勧めできるでしょう。客観的な姿勢をとりつつも、序言や結語の文言には、著者独特の情熱が感じられます。

なにぶん小さな本なので十分に語りきれないところがあり、未整理な点もあります。訳していて、いくつか通説と異なる箇所があつたので訳注をつけ、明らかな誤記は訂正しました。解説をご執筆くださった北海道大学スラブ研究センター専任講師、前田弘毅氏、ならびに東京大学大学院で地域文化研究を専攻する玄承洙氏に多くのご教示をいただいたことを記し、謝意を表します。人名、地名、機関名などの表記についても、両氏の監修のもと、疎漏なきを期しました。

書籍、ウェブサイトとしては、次のものを主に参照しました。

— 植田樹『チェチェン大戦争の真実』（日新報道）…歴史が詳しい。

— 林克明／大富亮『チェチェンで何が起きているのか』（高文研）…最近の流れがつかめます。

— アンナ・ポリトコフスカヤ『チェチェン やめられない戦争』（三浦みどり訳、NHK出版）…三浦氏に知人のロシア人が「彼女はまだ生きていられたの」と聞いたという逸話が示す通りの凄絶なルポルタージュ。

——チェチェン総合情報 <http://chechenews.org/index.htm> : チェチェン・ニュース発行人、大富氏のサイト。

——チェチェンウォッチ http://groups.msn.com/ChechenWatch/_whatsnew.msnw

末筆ながら、下書き原稿に目を通してくれた『ル・モンド・ディプロマティック』日本版メンバー 廣井淳一氏、そして白水社編集部の中川すみ氏の細心なサポートにお礼を述べます。

二〇〇五年六月

萩谷 良

Chakhibiev Z., *Le destin du peuple tchétchéno-ingouche*, Moscou, Rossiia molodaïa, 1996, 478p.

Les Tchétchènes : l'histoire et l'actualité, la composition et la rédaction générale de You Aïdaïev, Moscou, « Mir domu tvoiemu », 1996, 352p.

N. Bachkatov et A. Wilson, « Tchétchénie. Histoire d'un conflit », *Les Dossiers du GRIP*, n°1, Bruxelles, 1993.

貸出日 2022.5.11

参考文献

- Avtorkhanov A., *Essai historique-culturel et économique sur la Tchétchénie*, Rostov-sur-le-Don, « Severny Kavkaz », 1933, 56p.
- Avtorkhanov A., *Mémoires*. *Frankfurt-sur-Meine*, Possev-Verlag, 1983, 764p.
- Avtorkhanov A., (pseud. Alexandre Ouralov), *L'assassinat des peuples en URSS, L'assassinat du peuple tchétchène*, Munich : « Svobodny Kavkaz », 1952, 72p.
- Aptoukhine V., *La guerre civile en Tchétchénie en 1919*, *Novy Vostok*, Le nouvel Orient, vol. 8/9, 1925, p.162-177.
- Gritsenko N.P., *Le développement économique de la Tchétchénie-Ingouchie dans la période d'après la réforme, 1861-1900*, Grozny, 1963, 200p.
- La Tchétchénie soviétique a dix ans*, Rostov-sur-le-Don, Maison d'édition du Parti, 1933, 180p.
- Djamboulatova Z. K., *La construction culturelle dans la Tchétchénie-In-gouchie soviétique, 1920-1940*, Grozny, 1974, 236p.
- Efanov K. I., *La lutte de classes dans l'aoul tchétchéno-ingouche dans la période de la construction socialiste*, Grozny, 1979, 118p.
- Kolossov L. A., *La première génération du prolétariat de la Tchétchénie-Ingouchie, 1893-1917*, Grozny, 1965, 108p.
- Mamakiaev M. A., *Le teipe (clan) tchétchène dans la période de sa désintégration*, Grozny, 1973, 100p.
- Medaliev Kh. T., *L'activité du PCUS sur l'industrialisation socialiste des Républiques et régions nationales du Nord-Caucase. 1926-1937*, Naltchik, Elbrouss, 1972, 260p.
- Mouzaiev T., Todoua Z., *La nouvelle Tchetchenie-Ingouchie*, Moscou, Le groupe d'information et d'expertise Panorama, mai 1992, 44p.
- Zoëv S. O., *L'industrie de la RSSA de Tchétchénie-Ingouchie pour cinquante ans*, Grozny, 1965, 108p.
- Les essais sur l'histoire de la République socialiste soviétique autonome de Tchétchénie- Ingouchie dès l'Antiquité jusqu'à nos jours*, 2 vol., Grozny, 1967-1972 (316p... 360p.).
- Un chemin épineux vers la liberté*, Grozny, 1992, 110p.
- Yandarov A. D., *Le soufisme et l'idéologie du mouvement de libération nationale. De l'histoire du développement des idées sociales en Tchétchénie-Ingouchie dans les années 20-70 du XIX^e siècle*, Alma-Ata, « Naouka », 1975, 176p.
- Ce fut ainsi : Les répressions nationales en CRSS :1919-1952*, 3 vol. (336, 334 et 352p.).
- La tragédie tchétchène : qui est coupable?*, Moscou, Novosti, 1995, 112p.

一 〇 〇 五 年 七 月 二 五 日 発 行
 明 治 大 学 文 学 部 仏 文 科 卒
 印 刷 ・ 出 版 な ど の 会 社 に 勤 務 の の ち、
 「ル・モンド・デ・イブ・ロマティック」
 (平和をめざす翻訳者連合)の翻訳メンバー
 弘 文 館 翻 訳 者
 本 版、TUP

チエチエン

訳者 ©

萩

谷

村

雅

之

良

りょう

行

刷

社

株

式

株

式

株

式

発行所

株式会社

白水社

株

式

株

式

株

式

株

式

株

式

東京 都 千 代 田 区 神 田 小 川 町 三 の 二 四
 電 話 営 業 部 〇 三 (三 三 九 一) 七 八 一 一
 編 集 部 〇 三 (三 三 九 一) 七 八 一 一
 振 替 〇 〇 一 九 〇 一 五 一 三 三 二 八
 郵 便 番 号 一 〇 一 一 〇 〇 五 二
<http://www.hakususha.co.jp>
 乱 丁 ・ 落 丁 本 は、送 料 小 社 負 担 に て
 お 取 り 替 え い た し ま す。

製本：平河工業社
 ISBN4-560-50890-9
 Printed in Japan

〔R〕日本複写権センター委託出版物
 本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作
 権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望され
 る場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。